

特攻

第4号

〒102 東京都千代田区五番町12
 勸信行社内
 特攻隊慰霊顕彰会
 特攻平和観音奉賛会
 電話 03 (263) 0851
 編集人 最上貞雄
 発行人



特攻平和観音年次法要に集う
 正面は特攻平和観音堂

第35回世田谷

特攻平和観音年次法要

初秋の風さわやかに緑濃い木々に囲まれて、一入心安らく特攻平和観音のみ堂の前に集う関係者約四〇〇名。9月23日14時から年次法要が敷そかな裡にも旧友、ご遺族の和やかな語らいの中に行われた。

祭文

謹んで特攻戦士の御霊に申し上げます。
 我が国が自存自衛のためやむなくたった過ぐる大戦に於て、諸霊におかれましては、幾多る春秋に富む洋々たるべき人生を捨てて、空に海に陸に決然として肉弾攻撃を敢行し偉大な戦果を挙げ、一片の肉片すら残すことなく悉く散華されました。諸霊のこの特攻攻撃は真に至高至純の愛国心の発露として深く国民の胸奥に刻み込まれ、また世界の人々に強い感銘を与えたのであります。
 戦後の四十年、皆様方英霊のご加護により、日本の現状が諸霊が身を以て示されましたお心とは今尚、程遠いものがあるのを痛感いたす次第でございます。茲に更めて英霊の御心を心として精進を重ね、我国永遠の平和と発

展に努力いたしご遺族の末永きご幸福をお守り申し上げる決意でございます。
 本日茲に関係者故戦友相会し英霊に対し心から愛憎の誠を捧げる次第でございます。
 願はくば安らかに在しませんとす。

特攻平和観音奉賛会 会長 竹田 恒徳

追悼のこゝば (要旨)

初秋の風さわやかに緑濃い木々に囲まれて、一入心安らく特攻平和観音のみ前にぬかづき、飛行第二十戦隊島田治郎の姉として、偕越でございますがご遺族の皆様方に代り、六千柱のみ霊につつしんでご追悼の祈りを捧げます。

弟治郎は十八年一月お召しを受けて東京より帰郷いたし、生家より出征いたしました。まるで旅行にでも行くような晴れ晴れとした顔で、「お父さん、お母さん、お国のために役に立てるようなこんな丈夫な男に二十三年間育てて下さって本当に有難う御座います」と、よろこび一杯の表情で深々と頭を下げてお礼をいうのでした。「兄さん、家の事を頼みますよ」又「皆さん、父母家族をどうぞ宜しくおねがいたします」と丁重に周囲の方々に挨拶をすませた後、私に、「姉さん、これを僕だと思って何時迄も使って下さい」と、学生の頃下宿で使っていた白い地のコーヒーストをそとと渡して、無言で手をしっかりと握ってくれました。「ああ死を覚悟していましたが、弟にはその涙は見せることは出来ませんでした。あの時の温い手のぬくもりが今でも体に残っていて伝わって来る思

いでございます。

何カ月か経って「飛行機に乗ることになりました」と、たった一言の葉書が届いただけ。その中、終戦を迎えやがて特攻隊として嘉手納沖にて、二十年五月三日に戦死をしたとの報を頂いたのです。
 三日の弟治郎の命日には必らず熱いコーヒーを供えて一緒にのみながら、今日の法要などにてお会いした戦友の皆様方のお話をして上げて、供養を続けてはや四十年の月日が流れました。

ご遺族の皆様が、それぞれのお心の中に、お身体に刻みこまれた思い出を大切になされて、数少なくなられたご両親様共々、これからは、兄が、姉が、弟が、妹が、従弟妹達、そして若かった妻たちが、一層心こめてみ霊をお守り、お慰めして参りたいと存じます。そして純粋なる心と身体で、異常な日本の歴史の転換の時期に、若い生命を惜げもなく捧げた青年達の姿を語り伝えてゆく覚悟で御座います。その時間も残り少なくなりました。天におわします

み霊よ 安らかに眠り下さい。
 遺族代表 飛行第20戦隊 島田治郎
 姉 小沢千恵子

第9回特攻隊合同慰霊祭

左記により今年も合同慰霊祭を執り行います。

- 一、日時 4月5日(日) 一一〇〇
- 二、場所 慰霊祭 靖国神社
直会 私学会館

今年には靖国神社遊就館内の特攻関係展示も概ね完成し、奉納式も執り行いますので是非ご参拝下さい。

追悼の辞 (要旨)

願みますれば戦局我に利あらず祖国まさに危急存亡の秋を迎えて必死必殺の肉弾攻撃を展開し偉大なる戦果を挙げられ、更には文字通り命を捨てての猛烈な戦い振りを見せたことが、敵国をして我が民族を畏敬させ、本土上陸作戦、植民地化など最悪の事態から日本を救い、戦後の急速な復興、今日の平和繁栄の尊い礎石を築くこととなりました。郷等の献身は断じて無駄ではありません。

ここに諸勇士の御事蹟を偲ぶよすがとして我々回天部隊に例を藉りて心情を申述べさせて頂けますれば、回天は日本海軍が誇る九三式酸素魚雷を大きくして人が乗り、自在に操縦して三〇ノットの速力で水中を突撃し、一六トンの炸薬を敵船底にぶっつけ、ひとつの生命と引換えに、千人が乗る巨艦をも一撃のもとに屠る可能性を備えておりました。死ななければ任務を達成できない人間魚雷回天が完成し搭乗訓練を開始したのは、十九年七月サイパンを奪われ戦局俄かに急迫を告げた同年九月初ででありました。数多くの友がこの兵器での必死行を熱望し、ひたすらに死と直而した猛訓練を重ね、そして潜水艦と共に南溟遠く発進地点に到達し、心静かに突撃して行きました。

郷等をして特攻を希望し、更に出撃を熱望してまで遣らぬ途に就かせた動機は一体何だったのでありましようか。敬愛する我等が友の一人、久米松大尉は回天特別攻撃隊副隊長としてマリアナ海域に出撃、二十年六月三十日敵駆逐艦の猛烈を極めた爆雷攻撃のさなかに伊三六潜水艦より強行発進し、美事に

敵艦を殲すと共に母潜をも救いました。久米大尉の十九年八月の日記には「俺達は、俺達の親を、兄弟を、姉妹を愛し、友人を愛し、同胞を愛するが故に、彼等を安泰におかんが為には自己を犠牲にせねばならぬ。祖国敗るれば親も同胞も安らかに生きてゆくことは出来ぬのだ。我等の屍によって祖国が勝てるのなら満足ではないか」

我々の気持は正しくこの通りでした。日本の民族の至純至高の愛国心、国体護持の純忠、刀折れ矢尽きるまで戦う日本武士の伝統など、それぞれに明確であります。特攻志願より散華のときまでの長い日月の間、ゆるがぬ信念を支えた、より身近な心情は、事ここに至った今、自らの親兄弟、それに連なる麗わしき日本の民族、美しき日本の山河を滅亡から護り、平和な日本としてこの地上に残す為、吾が身を必中の弾丸に代える特攻である

戦後はや遠く郷等が身を捨てて安泰を希求された祖国日本は、困難を乗り越えてよく平和と繁栄を築き上げ、欧米との経済摩擦に苦しむまでに至っております。

然しながら精神面では、国を愛する心は一般には薄く、口先で平和・戦争反対と唱えているけれども、有事に国を護る是非、手段まで考えようとする風潮は寒心に耐えませぬ。

今日日本の平和、豊かさ、自由を、将来に亘り支えてゆくにはなお幾多の問題を抱えております。郷等の御遺志に副い祖国日本

の、また世界の真の恒久平和を確立することが生き残った我々の責務であることを自覚し、心を合わせ、力を尽してゆく覚悟を新たにすものであります。

願わくば永遠の加護を我等に賜わらんことを。

戦友代表 回天会 小瀬利春

特別攻撃隊の頌

わが国が存亡をかけた大東亜戦争においては、開戦当初から生還を期すことのない特攻作戦が実行された。

弱冠十七、八歳から三十歳代までの勇士が肉親への愛着を断る切り、洋々たるべき人生を捨てて、空に、海に、陸に、決然として肉弾攻撃を敢行し、偉大な戦果を挙げ、ことごとく散華された。その数およそ六千柱。壮烈無比なこの攻撃は敵の心胆を寒からしめ、国民はひとしくその純忠に感泣した。

特別攻撃隊の戦闘は、真に至高至純の愛国心の発露として国民の胸奥に生き続け、また世界の人びとに強い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている。

ここに心から愛惜の情をこめて特別攻撃隊の諸史料をこの遊就館に納め、その精神と偉業とを後世に伝える。

昭和六十年十二月八日
特別攻撃隊慰霊顕彰会
会長 竹田 恒徳

特別攻撃隊の頌 考

生田 惇

「特別攻撃隊の頌」の起案者の一人として、その解釈を試みたいと思います。もとよりこれは私の意見であって、奉賛会を代表するものではない事をあらかじめお断りしておきます。

書き出しは「我が国が存亡をかけた大東亜戦争……」となっています。太平洋戦争のほうか、今の若い人達には通りがよいのですが当時の国民の熱い願いを込めた「大東亜戦争」の名称をそのまま使いました。この戦いは本当に自存自衛のためやむなかつた自衛戦争でありましたが、長い歴史的事実も考慮して「存亡をかけた」と表現しました。そのような戦いであつたればこそ、開戦当初、真珠湾の特別攻撃隊に代表されるような決死の攻撃が相次いで行われたものと思えます。また、そのように必死で戦つたればこそ、戦後の活力ある日本が生まれたのではないでしようか。

この短い「頌」の中に「特攻作戦」という言葉が二回も出てきます。軍事常識から言つて、生還を期しえない作戦などあつてはならないのです。そのような作戦を数多く実施しなければならなかつたこの戦争の残酷さ、作戦指導部の苦悩ないし是非道を、文章のまずさを顧みず、二回の表出によって表現しようとしたのです。

特攻作戦はフィリピンに於いて本格化し、沖縄作戦で最高潮に達しました。そこでは子科練、少年飛行兵、予備下士出身などのまだうらわかい飛行士が魁を決して統々と

この必死行に参加しました。その年齢は17歳に過ぎませんでした。そして、その教官であった将校、下士官もその指揮官として、一緒に敵艦に突っ込んで行ったのです。正に言行一致、師弟愛の極致と言えないでしょうか。中には夫の決意に殉じて子供と共に入水した奥さんもあります。このような関係で、特攻勇士の年齢は17歳から30歳代までの広い範囲に亘っています。

特に目につくのは、宿望の学業を捨てて操縦桿を取るようになった予備学生、特別操縦隊員など、どの人をとって見ても今生きておられたならば必ず成功されたであろう立派な、力のある方々でした。正に、洋々たるべき人生を國の為に捧げられたのです。御両親のお嘆きはいかばかりであったでしょうか。まことに愛憎の情堪えがたいものがあります。

特別攻撃隊への参加は、志願によることを建前とされていましたが、その攻撃は命令により実行されたのです。そこでは、攻撃成果を最大にする為に、攻撃目標、攻撃時期などが示され、その決行が命じられたのです。これが特攻作戦です。

特別攻撃隊の様子について、須では簡単に「空に、海に、陸に、肉弾攻撃を敢行し」と述べていますが、その様子を語り尽くせないで、万感の思いを込めて簡単に表現しました。特攻戦没者は飛行機による方が最も多く、○○○名を越えています。海軍では特攻専用のロケット弾、桜花、陸軍では重爆撃機をそのまま爆弾に改装した、さくら弾など、特攻以外に使えない兵器もありますが、大部

分は普通の軍用機に重爆弾を積んで必中を期して敵艦船に突っ込んだのです。中には練習機で突っ込んだ方々も有ります。その成功率は大体6分の1と言われていますが、実際の威力にもまして、愛機が燃えながらも、なお敵艦に肉薄して行くその精神力が敵を恐怖に陥れたのです。

開戦以来の特殊潜航艇の活躍はよく知られていますが、昭和19年に現れた、回天は正に人間魚雷でした。その必殺の攻撃は、よく味方を取って、敵に大きな打撃を与えました。また、水中兵器としては、海中に潜伏して船底で機雷を爆発させる伏竜がありました。海上兵器では、モーターボートに爆薬を積んで敵艦船に激突する、海軍では震洋、陸軍では○があり、海上特攻は、比島作戦や沖繩作戦で成果を挙げています。

陸上では敵機の活動を押さえる為に救出の見込みのない空挺作戦が、敵機の充滿する飛行場に敢行されました。また、敵戦車を倒す為に戦車の前に爆薬をつけ敵に激突する戦法が採られた事もあります。このように見えてきますと、ここに挙げてきた特攻作戦のほかに、まだ数多くの特攻作戦が行われた可能性が有ります。

ここで忘れてならないのは、特攻兵器で訓練中に殉職された方、特攻隊員として訓練中に殉職された方、あるいは特攻作戦中無念に目的を達せずして戦死された方々の事であり、その方々の名は特攻戦死者名簿に有りませんけれども、その志を大切に、我々として出来る限りのことをすべきであらうと思います。

通常の攻撃では所望の効果は期待出来ず、専ら特攻攻撃に期待が寄せられる事になりました。特別攻撃隊の戦果は華々しく報道されました。実際の戦果は、それほど無かったにしても、当時日本軍が挙げえた戦果としては奇跡的な大戦果でありました。そして、また先に述べましたように、我々の知らないところで多くの特攻攻撃が実行され、その総合的な壮烈な攻撃が敵の心胆を寒からしめたので、当時の事を思いかえしてみると、国民は等しくその純真な魂に泣き、壮烈な行為に感謝したものです。須では、このようにして亡くなられた方々は、およそ六、〇〇〇柱といえます。この数字は、各種の特別攻撃隊をふくめての概数であります。もとより1柱まで数えあげるのが望ましいのですが、敗戦に伴う記録の散逸や、先程からの説明の事情によって、申し訳ないことながら概数に止めざるを得ませんでした。

戦後特別攻撃隊の事は、人々の心の中から忘れ去られたかのように見えます。それでも何か事ある時は、戦時中の特攻隊にまつわる強烈な印象を思い起こされる事でしょう。また、特別攻撃隊に関する記事を見たり、特攻隊員の遺品に触れたりしたときはなおさらです。それは純真な愛国心の尊さを蘇らせてくれるからです。実は、外国でも特攻隊に関する研究が行われ、多くの出版物も出ています。それらは日本人の心の尊厳さと強さを認めさせています。戦後の日本には、多くの若い仲間もいましたが、今日の日本の平和と発展は、特攻隊員の心の遺産がもたらされた

ともあれ、特攻隊員の方々はただひたすらに我が國の永遠の平和と発展を祈って敵艦船に突入し、神となられました。その心情を思うとき、哀惜の情耐え難いものがあります。私達は、ご遺族や戦友にお願ひして、永遠に存続しかつ存続するであろう靖國神社に特別攻撃隊関係の遺品や諸史料を奉納して戴き、それを遊就館に感銘深い形で展示されることを念願するものであります。このことが特攻隊員を顕彰し、その精神を後世に伝える最も重要な手段の一つであらうと考えます。

特攻隊慰霊顕彰会

設立運動の大要

副会長 秋山紋次郎

この会が設立されたのは、昭和五十六年六月十二日でしたが、それまでの経過の概要を要約すれば、つぎの通りになります。

発端は特攻平和観音奉賛会の再建

昭和五十二年十一月二十三日靖國神社での少年飛行兵の慰霊祭終了後、菅原道大將軍から特攻平和観音の奉賛会が解散したということを承りました。また別に詫間力平海軍大佐その他の関係者のお話しにより、名前だけを残して実質的に解散したのだと、名前でした。

至純至高の祖國愛から、肉弾となって散華された特攻勇士を慰霊顕彰する奉賛会がなくなつたという事は、その理由がどうであれ、まことに残念至極のことで、何とかして再建したいものだと思願するようになりました。

大戦末期、彼我の戦力が大きく開いてから

もともと特攻平和観音は、及川古志郎、高橋三吉、河辺正三各大将、菅原道大、寺岡陸平各中将が主となって発願造立、陸海軍の戦没特攻隊員をおまつりされたもので、その奉賛会の再組織は、おのづから陸海軍合同ということになりました。

そこで関連諸団体の会長、偕行社会長辰巳栄一閣下、水交社会会長庵原貫閣下、つばき会会長上田泰弘閣下、航空同人会会長渡邊篤孝先生および竹田恒徳殿下を始めとする有力者にお願ひして発起人になっていただき、さらに各団体から代表者を派遣してもらって設立委員会をつくり、再建運動に着手しました。

ところが、審議が進むにつれて、昭和五十二年二月頃から「特攻隊の慰霊顕彰は絶対に必要なが、それは何も特攻観音に限ったことではない、他にもいろいろの道があるので、慰霊顕彰の原点に立って幅を広くすべきだ」という意見が圧倒的になって参りました。

特攻隊慰霊顕彰会の設立へもっともな意見なので、発起人各位のご意向をお伺ひして、変針することとし、名称も特攻隊慰霊顕彰会と改め、検討を重ねて、その目標をつぎの四点に絞りました。

- 一、東京の要域に顕彰像等を建立する
- 二、靖国神社で毎年慰霊祭を行う
- 三、特攻隊の業績に関する刊行物を出す
- 四、特攻平和観音をはじめ各地の慰霊顕彰活動に協力する

この四点のなかで一番議論の多かったのが第一項で、東京の何処にどういう施設を建立するのかということでした。靖国神社境内、千鳥ヶ淵墓苑、皇居前広場、明治神宮境内などいろいろの案が出され、各案について、随

分な時間をかけて研究論議を重ねた結果、靖国神社境内（大鳥居内側附近）が最適ということになり、神社当局との交渉を開始しました。けれども神社側は、社是の手前もあり聞き入れるわけに参らず、昭和五十三年十一月二日池田良八権官司から明確な拒否の回答（口頭）がありました。

慰霊顕彰会の発足

こうした交渉、審議と平行して趣意書、会則、事業計画、募金要領の起草、修正を進め、また別に主要役員を選任を行ない、昭和五十六年五月名譽会長を竹田恒徳殿下にお願ひして夫々承諾を得ました。

そして諸準備が完了したので、昭和五十六年六月十三日第二回発起人会（第一回は昭和五十五年九月六日）を水交会に於て開催し、発起人各位の承認を受け、同時に会を発足する運びとなりました。

附記

特攻隊慰霊顕彰会が発足してから三月後、昭和五十六年九月末、初心に戻って特攻平和観音奉賛会の再組織に着手しました。そのポイントには、顕彰会と奉賛会の関係をどうするかにありましたが、これは、むかしの陸軍航空本部と航空総監部の編成・制度が二位一体であった古習いならって解決されました。

この構想に基づき再組織要綱を定め、その線に沿って爾後毎月十八日に会合を重ね、業務内容、人事などを審議決定し、昭和五十七年六月再組織を完了しました。

海軍特攻のあらまし

副理事長 鈴木瞭五郎

大東亜戦争に対処する帝国海軍の開戦決意は山本連合艦隊司令長官の言にあるごとく、

一、二年は思い切り戦つてみせるが、後は運を天に委せるといふ死中に活を求めぬ悲壮な特攻戦略によつていたといえる。日米の人力、資力、技術力、生産力そして軍事力各方面の大きな国力の差は特攻的作戦の推進による短期決戦の方策以外に成算はなかつたようである。しかし、戦争は四年の長きに及んでしまつたし、海軍の作戦も米國の情報、技術開発（レーダー、VT信管等）、戦力急増によつて次第に効能を失ひ、ガ島戦以後は敗退を繰り返し、緒戦段階に拡大し過ぎた宏大な勢力

は次第に縮少し分断されて戦争遂行能力の大部を失ふこととなり、遂に天皇の聖断により終戦となつた。このような戦史を省れば、帝国海軍は遅くとも山本連合艦隊司令長官の戦死をもつて終戦の機とすべきが一つの道理のようにも思われる。

昭和十六年十二月八日開戦劈頭のハワイ真珠湾攻撃そのものが特攻的作戦であつた。そしてその中で決行された特殊小型潜航艇により、神風特攻は所謂人間爆弾桜花を陸上攻撃機に用ひ、敵艦船に向けて発進させ体当たり攻撃を行つた。比島作戦段階になつた。

航空特攻は平易にいえば、神風特攻と神雷特攻の二つに分れる。神風特攻は航空機に爆弾を付けて敵艦隊に体当たり攻撃を行う戦法であり、神雷特攻は所謂人間爆弾桜花を陸上攻撃機に用ひ、敵艦船に向けて発進させ体当たり攻撃を行つた。比島作戦段階になつた。

丙型は昭和二十年に入って比島セブ、父島（一月）、ダバオ（五月）で戦つており、丁型（蛟竜）は昭和二十年三月沖繩作戦で活躍した。この特殊潜航艇の水の特攻戦術は人間魚雷回天と有翼小型潜水艇海竜を生んだ。回天は九三式魚雷を基に作られ、炸薬量一・六ト

ン、速力三〇ノット、射程二〇キロ、乗員一名で母潜水艇から発進する肉弾兵器であつた。回天特攻は昭和十九年十一月八日のウルシー攻撃に始まり、翌十二月にはアディミラルティ、ホーランジア方面、ウルシー（第2次）、グアムの攻撃（同年十二月）、さらに、昭和二十年に入ってウルシー（一月、五月）、硫黄島（二月）、沖繩（三月より五月）、西太平洋（六月から八月）で特攻作戦を行なつた。一方、海竜は水中飛行機のような二人乗りの有翼潜水艇で魚雷二本を装備していたが、本土決戦用として炸薬六〇〇キロの頭部に改装され、速力は水中一〇ノット、水上七・五ノット、航続距離四〇〇哩であつた。しかし本土決戦前に終戦となり実戦には参加せず終つてゐる。

航空特攻は平易にいえば、神風特攻と神雷特攻の二つに分れる。神風特攻は航空機に爆弾を付けて敵艦隊に体当たり攻撃を行う戦法であり、神雷特攻は所謂人間爆弾桜花を陸上攻撃機に用ひ、敵艦船に向けて発進させ体当たり攻撃を行つた。比島作戦段階になつた。

航空特攻は平易にいえば、神風特攻と神雷特攻の二つに分れる。神風特攻は航空機に爆弾を付けて敵艦隊に体当たり攻撃を行う戦法であり、神雷特攻は所謂人間爆弾桜花を陸上攻撃機に用ひ、敵艦船に向けて発進させ体当たり攻撃を行つた。比島作戦段階になつた。

航空特攻は平易にいえば、神風特攻と神雷特攻の二つに分れる。神風特攻は航空機に爆弾を付けて敵艦隊に体当たり攻撃を行う戦法であり、神雷特攻は所謂人間爆弾桜花を陸上攻撃機に用ひ、敵艦船に向けて発進させ体当たり攻撃を行つた。比島作戦段階になつた。

昭和十九年十月二十五日零戦による敷島隊が空母攻撃に殊勲を挙げたのを皮切りにこの神風特攻戦法は戦域作戦の主戦術と化してゆき、それは硫黄島作戦、沖繩作戦、サイパン攻撃、本土防衛作戦へと続行された。使用された航空機は零戦から始めて彗星(艦爆)、天山(艦攻)、銀河(陸爆)、月光(夜戦)、流星(艦攻)、彩雲(偵察)の第一線機から練習機(九九艦爆、九七艦攻、九六陸攻、白菊)にまで及び、携行爆弾は二五〇キロ、五〇〇キロ、八〇〇キロと機種と目標に応じて選ばれた。その投入機数は約一、〇〇〇機、戦死者二、五〇〇名に及ぶこの苛烈な特攻作戦は敵の心胆を寒からしめたが敵撃退の機を掴むまでに至らなかつたのは残念である。一方、神風特攻の桜花はロケット推進の有人ミサイロで炸薬五四〇キロの頭部をもち、速度約一、〇〇〇キロ。これを一式陸上攻撃機から発射した。しかし、この機の低速は特攻作戦成功のネックとなつたので、本土防衛作戦用としては母機を銀河に換える作業や洞窟からカタパルトで発射する戦法が準備された。神風特攻は神風特攻より早く考案準備されたが、その出撃は遅れ、昭和二十年三月二十一日九州鹿屋基地からその南東三六〇哩に迫つた敵機動部隊に対する攻撃を皮切りに、終戦に至るまで一〇回に及ぶ特攻作戦を決定した。神雷の名はその担任部隊たる海軍七二一海軍航空隊の通称から出ている。

このほか、海軍特攻には水上特攻と水際特攻があった。水上特攻は震洋艇と称する、ペニヤ板製の自動車エンジン付小型特攻ボートを敵上陸地点に配置して迎撃し、体当りする戦法であり、震洋艇は炸薬二五〇キ、一三ミ

リ機銃一、ロケット榴散弾二を装備し、一型は乗員一名、速力二八ノット、五型は乗員二名、速力三二ノットの快速艇であった。サイパン陥落以後震洋部隊は比島、台湾、小笠原のお堂。ここが日本で唯一の特攻平和観音を安置していることを知る人は少ない。「政治的に利用されたくありません」

以上のような各種海軍特攻を考察すると、緒戦から昭和十七年までは特潜による決死戦法が採用され、昭和十八年以降の後退段階に入つて航空、水中、水上、水際の各種必死戦法が考慮され、昭和十九年後期の崩壊段階に入つてこれらの必死戦法が遂に決行となつた。しかし、特攻戦法の効は奇襲にあり、常に多用は不慣の拙法とならう。

今日、十二月八日は大東亜戦争開戦四十五周年記念日である。当時の敢然として特攻作戦を戦つて散華した青少年と現在の平和繁栄を比べて散華して地獄と極楽の両面を見る思いや切である。

合掌 祈御冥福

霊安かれ特攻隊員

世田谷山観音寺、通称「世田谷観音」。東京都世田谷区下馬の住宅街の一角に、聖観世音菩薩を本尊とする寺がある。本堂のほかに不動明王、阿弥陀如来を安置するお堂。ここが日本で唯一の特攻平和観音を安置していることを知る人は少ない。「政治的に利用されたくありません」

世田谷山観音寺は、故太田陸軍大僧正が私財を投じ昭和十四年から十年かけて完成させた。金龍山浅草寺から開眼法要を受けたのは昭和二十六年。今では世田谷百景の一つに数えられている。千八百坪(五千九百四十平方メートル)の敷地には松三十余本が植えられ、春は桜の名所となる。

大僧正は若いころキリスト教徒だった。十歳から港区麻布にあるアンデレ教会に通い、英国人宣教師、コンウォール・リー女史から「ニコラス」という洗礼名を受けた。リー女史は群馬県・草津町に全財産を捧げた。及川、河辺両将軍が部下への許しをこらした大僧正を訪れ、患者らと食事をもにした大僧正は「ニコラス」という洗礼名を受けた。十歳から港区麻布にあるアンデレ教会に通い、英国人宣教師、コンウォール・リー女史から「ニコラス」という洗礼名を受けた。十歳から港区麻布にあるアンデレ教会に通い、英国人宣教師、コンウォール・リー女史から「ニコラス」という洗礼名を受けた。十歳から港区麻布にあるアンデレ教会に通い、英国人宣教師、コンウォール・リー女史から「ニコラス」という洗礼名を受けた。

太平洋戦争末期、二十歳前後の者が特攻隊を編成し、航空機や船で敵に体当たり攻撃を試みた。その数は四千六百有余名といふ。戦後、これら若者たちの霊を祭るため、及川古志郎元海軍大尉(故人)や河辺正三元陸軍大尉(故人)らが発起人となり、「特攻平和観音像」づくりを進め、像は昭和二十七年完成した。像は奈良・法隆寺の秘仏「夢違観音像」を模写縮小した一尺八寸(約六十七センチ)の金銅製。胎内には陸海四千六百十五人の特攻戦士の名を記した巻き書が納められた。及川、河辺両将軍が部下への許しをこらした大僧正を訪れ、患者らと食事をもにした大僧正は「ニコラス」という洗礼名を受けた。

「特攻平和観音」は東京・文京区の護国寺に一時安置された。しかし、複雑な事情で寺から出され、その後もGHQ(連合軍総司令部)の目が光るなど、混乱した情勢下で由緒ある寺は受け入れを拒絶した。

こうしたなかで友人から事情を聞いた大僧



正は、リー女史の献身愛を思い出し、堂の建問が年齢を増すに従って強くなりました。こ立を思い立った。堂は昭和三十一年五月、本だわってはいけな、とらわてはならない堂に並んで完成したが、大僧正はその前年のと自制を繰り返している積りではあります三十年五月、六十七歳でこの世を去った。が、やはり心の奥に不思議に思ひ気が残つておられます。

寺は大僧正の三男、賢照氏(五九)が守つておられます。それは特攻観音堂に奉祀されている特攻平

で安置されている。向かつて右側が陸軍特攻と観音像が陸軍、海軍夫々に一体あることで兵士二千人、左側が海軍特攻兵士二千六百十

五人の分。堂には隊員の遺書や写真も納められはできなかったのは何故なのかという疑問で

れている。遺書の冒頭には「お国のため……」す。池の中に立つ特攻平和観音像は、海陸軍の

という文字が見られるものの、最後は「親孝 特攻英霊を合祀して一体の観音像として顕現

行できず、先立つ不幸をお許し下さい」とい されているのです。この姿が本当のように私

った言葉で結ばれているという。 には思えるのです。 斎しく祖国の為に挺身された勇士の霊が、

寺には終戦直後の八月十九日、航空機をソ 斎しく祖国の為に挺身された勇士の霊が、

連軍に渡すのはしのびないと、駐留する戦車 観音像として顕現されているのであれば、海

隊に体当りを試みた満洲派遣の第一六六七五 軍も陸軍もない筈です。

部隊の青年将校十人などの霊も祭られてい 昭和二十七年に特攻平和観音像が出来あが

る。 毎朝、毎夕、平和観音に経を唱え続ける までには、色々ないきさつがあつて、海、

職は「私たちは、一億特攻」と聞いて育ちま 陸が別々の像になったようですが残念なこと

したが、四千六百余の御柱はまさにわれわれ です。私には恥しいことのように思えるので

の身代わり、「護国の守り」です。かわいそ うとか、霊を慰めるというのではありませ

ん。国の守り神として祭るのです。ただ、政 ない方がよくはないかと思えてなりません。

年寄の独り言

斉藤 義雄

菅原 道熙

昭和四十二年の暮、世田谷山観音寺に特攻 毎月十八日午後二時からの月例法要を念頭

平和観音様がお祀りしてあることを、尊敬す に置きながら、昨年は三度に一度位しか参列

る大先輩から知らされて以来、お参りしてお 出来ず大変心苦しく存じて居ります。

ります。初めの頃から不思議に思っていた疑 焦土の中から民族のエネルギーを結集して

月例法要

菅原 道熙

菅原 道熙

驚異の復興を為し遂げた今日、全世界から経 済戦争で指弾を受けている我国の現状を、ま

た「飽食の時代」「新人類の出現」等といわ れる世相を、在天の英霊は如何に照覧されて

居られるのであろうか。 二十一世紀を十三年後に控えて、如何に現

状を打開して行くのか、民族の教智とエネルギーを信じつつ、とつおいつ考えを廻らして

浦安の国

二瓶英二郎

古来、日本の国号を「浦安の国」と云われ ました。

「ウラ」とは心、「浦安の國」とは「心安 らかな国」ということになりました。

明治天皇の御製に「浦安の國」の御述懐が 歌われて居ります。

うけつぎてまもるもうれしちはやふる 神のさだめしうらやすの國

國のいしずえとなつて、陸に、海に、空に 尊い命を散華せられたる、英霊の御魂の心

は、この「浦安の國」を守り抜かんとせられ たのであります。

祖先の神々が修理固成された尊い日本の國 有、國民と共に力を合せて、断じて守り抜

く、國民と共に力を合せて、断じて守り抜 け、この戦術では沖繩攻防戦が想定された。

うではないかと歌われた、明治天皇の御製を しかも想定戦力はまさに当時の日本の現有勢

力そのものであった。 御製

ちはやふる 神のかためしわが國を 民と共に

守らざらめや

昔から日本では本来「征伐する」という意 味の言葉を一「言向け和平す」(古事記)など と表現して居ります。言葉をもって和らげる

は同義語であったのであります。 こうしたことを考えてみると、この「心安

らかな國」の、日本人が、昔から、いかに平 和を愛好する民族であった事が知られます。

今上陛下の御製に 天地の神にぞ祈る朝なぎの

海のごとくに波たため世を と仰せられているのを拝するとき大御心の

悲しき命 滝寺 洋一

終戦当時の思い出の一つに、陸軍航空士官 学校在学中に受けた図上戦術がある。時は同

校卒業直前の昭和二十年初頭の一月月間余。 戦術とは、戦況を想定し、その進展に応じて

軍あるいは師団の長としての決心、その理 由、処置などが逐次設問され、その都度提出

する回答に教官が原案(模範回答)を示して 講評するという一種のケース・スタディーで

ある。当時まだ米軍の沖繩進攻前であつた が、この戦術では沖繩攻防戦が想定された。

しかも想定戦力はまさに当時の日本の現有勢 力そのものであった。

戦況は次第に進展し、ついに沖繩のわが地 上軍は玉碎す前、制空制海権はほぼ米軍に帰

するといった最悪の状態が想定され、この状 況下における航空軍司令官の決心如何という

のが、この戦術における最後の設問であつ た。それに対し私共は各人各様苦肉の策を絞

って答案を作成したが、教官団によって示された原案は、「一、決心—死以テ君恩ニ報ヒ奉ル。二、理由—処置ナシ」という戦術の型を破る意外なものであった。後日この記憶を同期のある友人に話したところ、理由の「処置ナシ」は教官の口頭での説明で、彼の記憶では「もののふの 悲しき命 積み重ね積み重ね守る 大和島根を 詠人不知」という短歌が記されていたということであった。要するにここまでくると手だてではない、死以外にはないという悲壮な結論である。

かくも絶望的な戦術はおそらく軍創設以来最初で最後のものではなかったかと思う。そして陸士卒業後の四月には、米軍の沖組進攻がはじまり、現実にはほこの戦術で想定した通りに展開した。かくて八月十五日の終戦へと至るのである。

昭和二十四年、大学卒業のときの茶話会で、刑法の木村亀二先生から、「この期には軍出身者が多く当初は帝国大学の伝統が攪乱されるのではないかと心配した。しかしこの三年間そうした人々も真面目に勉強し、決してアブノーマルな人種ではないということが判った。安心して送り出すことができる」といった趣旨のスピーチがあり深い感銘を覚えた。このように生き残った私共は、早やばやと普通人宣言を受け、その後の平和と繁栄を享受してきた。だが、これも、それがたとえ「もののふ」であると「市民」であるとを問わず、積み重ねられた多くの戦争犠牲者の悲しき命の上にあるということを忘れてはならぬと思う。

(国際証券株事務取締役)

特別攻撃隊を讃う

陸士57期 佐藤 哲夫

彼のいくさ、我ら嘗て大東亜戦争と名付けたるいくさの何故に起り、何故に終焉せしや、後世の人、様々に之を説けども、未だしかと之を知るに至らない。

先哲は言ふ。曰く、「知るものは言はず言ふものは知らず」と。しかも、歲月既に遙かにして、往時のことも夢のごとく、幻のごとき感なきにしもあらず。民族の生命を賭せる彼のいくさの悲愴萬斛の思ひまた、国民の脳裡より消え去らんとしつゝあるに似る。

ここに至りて、我ら俄かに思ふ。敢へて去り行く日々と消え行く時の流れに抗せずんば非ず。何れの日にか、正しき歴史がその絶を断する日も訪れるであらう。しかし、我らはその日を待てないと。彼の日、彼の時、「あとに続く者ある。」を信じて、或いは雷電の如く、或いは疾風の如く、或いは怒濤の如く、眈を決し、黙々その青春の一身の死を前提に、蹶起って、敵艦、敵陣へ体当りして散った、若き日本の

益荒男たち、六千に及ぶ諸兄らの、その短かかりし生涯と、その英雄とに我等は心から呼びかける。諸兄の一人が心を籠めておごそかに歌って。すめろぎに仕へまつればははそはの母に尽くすとひとつこの我は。今はただ仇し討つべし文おくも。文おとらふる国ならなくに。また、諸兄の一人は、出で立ちの前に優く

歌っている。

ひとりとぶもひとりにあらずふところなき
みをいだきて空ゆく我は
ふるさとに今宵かぎりの命ぞと
知らでや人の我を待つらむ

嗚呼、この歌の深き心は、正しく国民同胞への愛と慈悲との極限に立ちつくしている。そればかりではない。蘭々として征った諸兄の決死行は、それを知ると否とにかかわらず、実は同時にあまねく世界人類への大慈悲でもあったのだ。

フランスの文人にして英傑アンドレ・マルロー氏は言っている。「騎士道とは、鎧にあらず兜にあらず。それは、真におのれの意志するところを知り、その意志に自己の全人生をささげて悔いなき人々の全体にはかならない。」そしてまた「神風特攻隊のメンバーはほとんど例外なくその先祖が武士だったのだよ」と。マルロー氏は、諸兄がその若き一身をもつて現成した一挙に永遠なるものの姿を見止めたのだ。

一國のみに非ず、世界の危急存亡の時にあり、一死もつて献身せる諸兄の慈悲行の是認の上にも、アンドレ・マルロー氏ははるるところの英雄的日本の表現があると信ずる。特別攻撃隊六千の諸士の英霊よ。我らを導け。

特攻兵士の江差追分

資料提供 陸士56期 水野 帝

護国隊牧野顯吉君の追悼慰霊祭(中島泰明氏) 七月中旬の暑い土曜日の午さがり。緑丘(旧制小樽高商)の慰霊塔の前から時ならぬ「江差追分」の切々たる調べが流れた――

集った十三人の級友が唱い終る途長い長い
時間であったように思われた。
特攻隊員としてレイテ湾オルモックの敵艦に突入した牧野顯吉君への追悼の調べが江差追分であった。

今しがた上映されたニュース映画を固唾を飲んで見守った。最後の別益を受ける時、彼は二三度まばたきし、口元を一寸ゆがめた。死を決した彼の風貌は異様な程壯絶味を帯び、視線を一点に据えていたと見えた。合掌ラジオの放送は特別攻撃隊の隊員が、明日

の出撃を前にして辞世の言葉を語り、かくし芸を披露する内容であった。そこで隊員たちは若し声で詩吟や歌を唄った。陸士は、全身を走り抜ける感動で居すまいを正して放送を聞いていた。突然、牧野顯吉少尉という名前が飛び込んで来た。

陸士は昭和十六・七年頃、登校の毎朝、花園公園の入口でゆきあう小樽高商の生徒がいた。お互いに言葉かけ合うこともなかった。その青年が明日、必死の体当り攻撃に赴くとを知ったのである。江差追分の歌を聞き乍ら、陸士は泣き続けた。(或る俳人の投稿)

敵人の兵士が故郷の弟に呼びかけて「北海道で覚えた歌をうたう」と江差追分をうたった。彼は、確実な死を前にして、どんな思ひで追分をうたったことだろうか。何節目かで声が震え、歌が途切れた。彼は泣いていたのだ。さほどうまくない初心者の追分だったと思う。しかし、あれは私が聞いたなかで一番悲壯で美しい追分だ。(当時中学生の一高校教師の投稿より)

昭和十九年十二月十七日ラジオ全国放送 顯吉辞世のことは(実兄野牧正雄氏提供)

通算収支計算書

自昭和56年4月1日
至昭和16年12月31日

特攻隊慰霊顕彰会

科 目	金 額	金 額
収入の部	円	円
1 募集基金収入	55,346,826	
2 特別会費収入 (寄附金含む)	7,586,500	
3 月例会費収入	646,500	
4 受取利息	2,989,592	
5 雑 収 入	272,220	
収入の部合計		(66,841,638)
支出の部		
1 募集基金費用	5,061,248	
2 特別会費用	9,465,351	
3 月例会費用	1,373,152	
4 賃 借 料	133,400	
5 渉 外 費	458,190	
6 図 書 費	19,740	
7 諸 税 公 課	346,470	
支出の部合計		(16,857,551)
通算収支差額		49,984,087

注 通算収支差額 49,984,087円と、56,331現在在剰
余金(普通預金残高) 138,300円とを加算した
金額が、財産目録資産合計 50,122,387円であ
る。募金開始は、58年8月。

貸借対照表

特攻隊慰霊顕彰会

昭和61年12月31日

科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部	円	負債の部	円
現 金	46,830		
普 通 預 金	427,345		
(三菱市ヶ谷)	(25,186)		
(一勸四ツ谷)	(30,979)	計	
(一勸市ヶ谷)	(364,034)		
(富士市ヶ谷)	(7,146)		
定期預金	34,111,675	正味財産の部	
(三菱市ヶ谷)	(4,278,337)	前期繰越残高	49,494,378
(一勸四ツ谷)	(8,892,889)	当期収支差額	628,009
(一勸市ヶ谷)	(20,940,449)	次期繰越残高	50,122,387
郵便振替	30,480		
(東京4-59580)			
割引債	3,040,885		
野村証券			
中期国債	5,246,582		
野村証券			
模型・備品	7,213,590		
前渡金	5,000		
合 計	50,122,387	合 計	50,122,387

以上のとおり報告します。
昭和61年12月31日

特攻隊慰霊顕彰会

会長 竹田 恒徳
事務局長 九田 文雄
最上 貞雄

父上・兄上そして弟よ、顕吉はいま神国永
遠の繁栄を一身に背負って任務に飛立ちま
す。地下の亡き母も喜んで迎えて下さるでし
ょう。一族一門の期待に副うべく南溟の防人
となります。自分は余りにも光榮で只感涙、
弟よ火薬の研究はどうだ、死力を尽くして頑
張って呉れ。自分が夏休みで北海道から帰っ
た時、よくロサさんだ追分を聞いてくれ。
けふる渚に陽はたそがれて、沖に江差の灯
がともる……

「ドンちゃん」道場七郎君(鎌倉啓三氏)
出撃前に江差追分を唄った特攻隊員がもう
一人います。昭和十九年十一月二十七日レイ
テ湾に突っ込んだ、「ドンちゃん」道場七郎
君です。

昭和十九年十一月二十九日十四時大本営発
表として、地元北海道新聞は

「小樽出身の八紘隊員道場少尉」「自分は
体当りの身、飛機そよき伴侶、母に書送る必
死必殺の決意」と彼の航空服姿の写真と共に
三段の見出しである。その中に次の記事が載
っていた。

非常に親しいで母イトさん(57)を慰める
便りは週一回欠かしたことなく、その便りに
は「同封の写真は米軍をにらみつけている私
の勇姿です」などと軍隊生活を逐一報告して
いた。またイトさんが「お嫁さんをお願いな
さい」と手紙を送れば「自分の妻は飛行機で
す。体当りする私にこれ以上のよき伴侶はあ
りません」と固い決意を示していた。

辞世となった歌に
今ははや 思ふことなく大君の
御為死なむ我にしあれば

又、姉の夫に送っている手紙には

海山に似たるもあつきはらからの
恵みを思い謝しつづ征かむ

小学校時代の友人が、「小学生時代、彼は
少年団に参加し、プラスチックの先頭で太鼓
をたたいていた。それでドンちゃんのあだ名
が生れた」と懐しそうに語っていた。

追分節は美しい曲ですが、特攻の追分ほど
悲しい歌はありません。死の直前まで冷静
で、朗々と別れの歌をうたったとなると、悲
しみというより怒りさえ覚えます。若者に死
を宣告するに等しい特攻、その事実が今から
わずか四十二年前という近い過去に存在した
ことを、多くの人たちに再認識してほしいと
思います。(お二人共特操1期) 文責編集子

編集後記

出撃三日位前からの顔は、神々しい程の美
しさに輝やっていた。特攻隊員を命ぜられて
からの心奥の葛藤は、是は笑いながらも、深
夜人知れずに流す涙が、隠そうにも同期生に
は伝わっていた。然しその日が迫って寸前に
なると、ハット打たれるような凜然従容とし
て落着いた顔付になっていた。この編成をし
て落着いた原稿を手渡ししてくれた或る先輩の
話である。

遊就館の完成は一つの大きな節目であり、
集められた遺品を、交代々々で陳列できるこ
とは、何よりの慰霊になることであろう。

この「特攻」の記事の中に、たとえ一人宛
であっても、隠されたエピソードを掲載出来
れば、せめてもの慰霊の一助となるのではな
からうか。行事の報告や投稿の中に、珠玉の
如く輝く亡き人の生前のことがらをご紹介し
続けることを念じております。(編集子)